〔書　評〕

山田忠雄述『近代国語辞書の歩み――その摸倣と創意と――　上・下』をよみて

佐藤　茂

本書二冊を入手したのは昭和五十六年七月の刊行直後であったが、半年ほどは拾ひよみをする程度にて、じっくりよむといふことにはいたらなかった。同年十二月二十一日付の国語学会編集委員会よりの書面にて本書の書評の依頼をうけ、同月二十五日付にて承諾の返事を出した。

はじめに、承諾したことにつき寸言しておく。二千頁近い大著ともいふべきものであるから、述者の調査研究したることにつき再調査し、再検討を加へるといふ作業を行なっていくならば、恐らく述者のかけし年数と同じかあるいはそれ以上の年数を要するであらう。そのことを承知の上でひきうけたのは、当然のことながら評者なりの考へにもとづくことによる。

述者が精魂を傾け、数十年を要した仕事であるから、いづれ何年後か何十年後かには、名実ともに備った書評が現れるであらう。しかし編集委の依頼の枚数は四百字詰二十枚であり、締切は昭和五十七年六月末日である。編集委が名実ともに備はれる書評を期待するとは毛頭考へられない。しかし、次にしるす理由によっても、書評の名において一読者としての寸感ならば二十枚程度にしるすことも可能ならんと考へ、承諾したのである。よって本稿に敢て「よみて」としるしたわけである。

理由といふほどではないが、述者と評者とはともに昭和八年四月第二高等学校文科甲類に入学した。爾来述者を畏友として兄事し今日にいたった。まさに足かけ五十年である。ただしこのことは私事であって、本稿には無関係ともいふべきであるが、述者も評者も人間であり、普通の感情をもってゐる以上はその私事が若干の影響を与へぬとはいへないであらう。

既に本誌上にては第百二十八集に松井栄一「『近代国語辞書の歩み―余説第二章』について」があり、第百二十九集にては竹岡正夫「国語学史・国語研究資料」にて若干の言及（十一頁下段に九行）がある。一方新聞紙上にてはいくつかのものに紹介があった。よって本稿にてはそれらとの重複は避けたいと考へた。

本稿執筆までに一通りよみつつ、しるしをつけたり、まるをつけたり、疑問のしるしをつけたり、感心して二重丸をつけたりしていった。本年一月末頃に改めて三省堂より寄贈をうけた本書はかくしてまっ黒となった。そのしるしをノートに整理し、メモしていく

と、今度はノートが一杯になってしまった。そこに先日若杉哲男君より山田忠雄述「『近代国語辞書の歩み』それから」(『書誌索引展望』第六巻第二号、一九八二年五月)のコピーを頂いた。このコピーは内容的には本書のつづきである。この掲載誌が本書の読者にひろく知られてゐるかすこし案じられるが。

以上が本稿執筆までの過程である。以下紙面の許される範囲内にて寸感をつづる。

前述の如く、昨年の半年は拾ひよみの程度であったが、本年の半年ははじめから一行一行一度二度とよんだ。よむことにのみ、あけてもくれてもかかってゐるわけではないから、一行もよまぬ日もあったが、時としては数時間お茶ものまずによみすすんだ日もある。とにかくよむことはよんだつもりである。

編集委よりの依頼がもしひとことでよいといふならすぐいへる。「たのしかった」といふことである。気持よかった、爽やかだったともいへる。そのたのしさ・気持よさ・爽やかさはどこに起因するであらうか。

それは上下二冊の隅々にまであふれてゐる述者山田の人間である。山田忠雄といふ人間の書である。したがって述者の筆は時として家族のことにふれ、友人のことに言及し、幼時の回想にもはしる。それは足立巻一『やちまた上下』への述者の関心からもおしはかられる。人あって山田の饒舌といふかもしれぬ。しかし饒舌があっていいではないか。山田も妻子ある人間なのである。

右は人間としての述者としては当然のことであるが、国語学者としての述者の言語観・学問観を随所にみることのできるのが、本書の核といへよう。引用するまでもないかもしれぬが、そのことの一端は、

……これからの辞書編纂家の資格としては　独自の日本語観・言語観・社会観・人生観、総じて言えば、透徹した哲学と犀利な直観との持主であることを必須の条件とする。(上四六一頁)

にもみることができる。これらにつき体系的・具体的にしめすことは本書においては頁数からいって無理であったらうと思はれるが、その片鱗のいくつかがいたるところに示されてゐることは、読者何人も看過できぬであらう。

述者の態度を端的に見うるのはさきに示した「それから」の〈はじめに〉全部であらう。若干引用すると、

真成の学者は著述を行わないものだと、よく言われる。又事実そうでもあるようだ。但し私は、真成の学者ではない上に、20余年フリーである故、著述でもしないと途徹もない怠け者と見られるのが嫌さに、昨夏『近代国語辞書の歩み』という小著を世に送った。

とまづしるす。更に、

凡そ35年前から準備を進めて来た本邦辞書史概説の構想からすれば、それは全体の拾遺もしくは最終部分に属するので、図らずしも倒叙の第1冊ということになった。旧著『三代の辞書』とは別の意味での倒叙である。……

といひ、また、

後の雁が先になった嫌いはあるが、この一種の〈道草〉は私に、後来の著述の構想――江戸期から室町期・鎌倉期・平安朝へと遡り、それぞれ一著を成す――を固めさせる上に与(あずか)って力があった。……

とつづけてゐる。このあとに〈私の余命を以てするならば〉の言があるが、かかる言は評者も頃日よく口にするところ、一日一日を大事に考へ、その上にて行動することは述者・評者を問はず、この道に志して還暦をすぎるにいたるときには何人も思ふところであらう。

〈真成の学者ではない〉といひ〈小著〉といひ〈一種の道草〉といふは述者の本領であらう。謙辞といふはあたらぬであらう。自己の仕事に忠実であれば、かかる言となるであらう。そしてその〈小著〉に〈道草〉に全力を傾けた姿を上下二冊全体にわたってみることができた。

本書をくりかへしよむときに、評者としては、述者の国語学において、本書は如何なる位置を占めるのであるかといふことが念頭にあった。国語学全体につき論じた述者のものとして、管見にては日本大学通信教育部発行にかかる『国語学概論』三冊（I～VI、昭和四十三年四月二十五日刊、非売品）がある。相当以前に酒井憲二君の好意により入手することができた。第二冊の終りに（二七、九、二四）、第三冊の終りに（二七、十二、三十）とあるところを見ると、執筆はほぼ三十年前といふことになる。第一冊は全体論・根本論、第二・三冊はほぼ各論とみえようか。第一冊のはじめの方で、

一般言語学を　全とすれば　国語学は　まさに　個でなければならない。個が　個として　その存在を　まったうする　ゆゑんは　全に　没入し　依存することにのみ　存するのではない。真に　個に　徹しえた　ときにこそ　はじめて　全に通ずる　みちが　ひらけるものと　かんがふべきである。（二頁）

と述べてゐるのは上欄に「国語学と　一般言語学とは　個と　全の関係である」と要約される。言語学と国語学とにつきしるした三十年前の述者の見解は恐らく今日も変るところなからんと評者は忖度するが、如何であらうか。

このごろ多い数ではないかもしれぬが、研究者の中には職人的研究者とでも称すべき方にぶつかることがある。評者は研究者と目する方と会ふと必ず「今何をやってますか」ときく。はじめての方にも「どんなことをやってますか」ときく。

それにつき答へをききつつ話してゐる中に、「わたしは室町をやってゐるので上代は知りません」とか「そこはわたしの守備範囲でありません」とか、時には「語彙をやってますので文法は関係ありません」などといふ暴言にぶつかることがある。かかる職人的研究家は本書に対したときに如何に処するのであらうか。最近も近世語の研究に従ってゐると目される研究家に「この本をよみましたか」ときいたら「昨年七月にすぐ買ひましたが、積んであります。直接関係しないので」といふ唖然たる答へがかへってきた。わたしはこの書評といふことのまへに、いやしくも国語学の研究に従ってゐる方は、ともかくまづよんで頂きたいといひたい。書評は一往よんでみるが本そのものはよまないなどといふものぐさの撲滅のために。したがって本稿は、読者が本書をよんでゐることを前提としてゐる。

今後何十年か何百年か後に本書がひもとかれるとき、まづ活用価値の大きいものは下の相当頁を占める「第一・二部　附表」であらう。この附表を一行一行見ていくと、昭和三十三年十一月九日のことをまづ想起する。

この日午後一時半より神田三崎町の日本大学大学院法学研究科一

○一番教室にて国語学会の公開講演会（東京第38回）があった。山田忠雄「漢和辞典の成立と漢語辞書」と池上禎造「国語辞書と漢語」とであった。山田の講演は『国語学』第三十九集に「漢和字典の成立」として示されてゐるが、終りに〈昭和三十四年五月六日　草しをはんぬ〉とあることからみて、講演のあと六ケ月間にてあらためて草したものであることが明らかである。これには附録があり、講演のとき配布せしものに改訂を加へた「本邦辞書史概説　附表――会玉篇から漢和字典へ――」がある。小さい活字で四十頁ほどのものである。講演会のあと懇親会への出席を失礼して、上野発の夜行列車にのった。乗車して直ちに配布されたリストを一々よんでいったことを想起する。一通りみをへたときは深夜であった。

また山田忠雄編『板開類分節用集目録』（昭和三十六年五月二十日　大東急記念文庫文化講座ノタメ）がある。同目録を編者より贈られ落手したのは七月七日であった。このときからも二十一年を経た。

これら二つのリストのことは「第一・二部　附表」の〈凡例　十一の7〉にも述べられてゐる。これらリストにいふ旧No.である。二つのリストのおかげを今日まで相当にうけ、リストになきものに接したるときは、つとめて連絡をしてきただけに、この「附表」をみるとき、この「附表」に述者の数十年の思ひがこめられてゐるとみるのは評者だけではあるまい。

本文中にも性質上「附表」の内容に等しきものの数々はあるが、特に上五六五―五七三頁の〈言海書誌〉は注目に価しよう。述者自身さきの「それから」の中にて、

私は、言海書誌に無慮8ページを費したが、そのライバルと目される『日本大辞書』（山田美妙著）のそれには殆ど力を用いなかった。それには如何なる弁解も不用である。……

と述べ、〈無慮〉といふ。参考までであるが、『新明解国語辞典　第三版第二刷』には、〈無慮〉につき、

（副）一一数えきれないほど多いのだが、概数を言えば。「死傷者は――数千人」

とある。この語釈がそのまま引用の〈無慮〉にあてはまるかどうかは読者諸賢の判断にまかせることとする。

本書の内容は紹介いたすまでもなからうが、上巻は小引・例言・序説・本論、下巻は附説・餘説・第一・二部附表・レジュメに代えて、の如くである。小引の終りに述べし、

……〈人の世の情〉の上に育まれた者である事だけは否定出来ぬ。千言万句　費しても猶感謝の言葉は足らぬ、といって憚らぬ。

の言は〈長き旅路を終〉へし述者のそのままの心境とうけとれて気持がいい。

語釈・用例・注釈に関することどもは上下いたるところにある。同じことにつき、くりかへしくりかへし述べる。このことが「附表」とともに本書の中心・生命なることをひしひしと思ふ。小引の中にも述べし、

非辞書体は辞書体に勝る

は非辞書体における注釈的態度に学ぶことを強調した言である。言をかへれば、一に実証、二に実証、三に実証といってもいいであらう。

例言の二のはじめに、

本著は、この規模において明治以降の国語辞書を体系的に概観

した最初の書下しの述作である。その点に　限り無き誇りを持つと同時に、又自ら一の危惧を抱かざるを得ない。……

としるす。〈誇り〉は〈自負〉とも通ずるであらうが、〈危惧〉は不安・心配に通ずる。数十年の蓄積により、世に問ふのであるから、〈誇り〉と〈危惧〉とは当然併存するであらう。例言の結びに、

……一著毎に辞世と観ずる心構えが必要のように思う。

とあるは十二分に理解しうるつもりである。

簡明目次につづいての目次が詳細であるのは読者にとってまことに便利である。しかもその詳細は各頁にそのまま示される。この頁が何を扱ってゐるかを直ちにしりうる。至便といへよう。

序説のはじめ二―三頁に示したる辞書の類別により、本書にて扱ふ普通辞書の位置づけをよく知りうるし、見出し語の排列方式と種類・与へられる情報との類別の姿をまづ知りうる。なほ、さきの節用集目録のはじめにも〈分類基準表（代目次）〉のあることよく知られてゐる如くである。

この〈辞書の類別〉を見てゐると、色々のことが思はれる。本書にては、国語辞書として自国語辞書の中の普通辞書（国語辞典・漢和辞典）を宗とし、傍ら其との対比において古典の難語解を取上げるとあるが、明治以降百年余の間に、表にもある如き相当のものがある。当然関連して言及せる数々はあったのであるが、それは必要なること・部分的のことにとどめたといへよう。

評者の考へにては、ことばの研究はすべてのことばが対象である。それは当然のことであらうが、その当然のことが中々行なはれない。日本語においてもそのことは全く同じである。すべての日本語が対象である。

さうしたすべての日本語を研究の対象とするとき、国語辞書は如何なる役目を果すのであるか。あらゆる日本語を解明できるのか。できないのか。何か限度があるのか。枠があるのか。辞書の形式・類別の如何を問はず、本書の対象としたるすべての辞書を扱ふのがもとより本道であらう。

またこのわづかな紙数にては述べきれないが、一つの辞書の誕生のあるとき、その製作過程・扱ひし資料、それらのものの同時代の日本語のすべての資料との周到綿密なる対比、さうした作業の上に立って、一つの辞書の評価が行なはれるべきであらう。

今、そのことを一々具体的に本書での考究のあり方を分析するスペイスは全くないが、本書の副題にある如く〈摸倣と創意と〉に、主たるメスをあて、熱心に徹底的に論及せる筆者の筆致には十分に接しうるのである。

ただし世の辞書研究家と称される中には、辞書だけの内部のこと、辞書の間の比較のこと、辞書の中の見出し語の比較のことなどには熱心であっても同時代の言語資料のすべてについて討究し調査し、それが辞書の上に如何に反映せられしかの論は中々示さぬといふ方が見うけられるのではなからうか。

本書の述者もその手合と同じだなどといふほど、評者はをかしくはないつもりである。ただし辞書における〈摸倣と創意と〉とともに、一つの辞書と同時代のすべての日本語の資料との対比といふ点よりするならば、非常に詳しいと目される資料の数々のある一方においては、さうした辞書以外の日本語の資料そのものに如何に対してきたか、対してゐるのかのことをつかみにくい面も少なくない。言海書誌にかぎらぬが、書誌面のことはもとより根本であらう。『言

海』の〈本書編纂ノ大意〉の（一）の冒頭に、

　此書ハ、日本普通語ノ辞書ナリ。……

とあるは周知のことである。今日〈普通語〉なる用語にはあまり接しない。評者の考へにては〈普通語〉といふことをはじめに述べたところに大槻文彦の根本があったとうけとってゐる。ここにおける〈普通語〉とは何か。当然のことであらうが、所収語一つ一つ、すなはち終りの「言海採収語……類別表」に示されし計三九、一〇三につき検討することとならう。

　その点についての述者の努力、その記述のあとはみることができたつもりであるが、その記述によって〈普通語〉の具体的な内容が十分に理解しえたといふ段階には、評者はまだいたらない。述者は如何であらうか。読者各位は如何であらうか。

　辞書の見出し語の数、項目の中の関連する語の数、これらの計算といふか、数へることそのものは国研も創立当初の何年かはやってをり、現在は昭和五十二年度末に設けられし国語辞典編集準備委員会、更に五十四年度よりの国語辞典編集準備室もやってゐることであらう。本書の述者も上下いたるところに、数に関する記述、いくつかの表を示してをり、その作業の状況を想像しうる思ひである。

　数々の辞書のあった明治以降の百年余に限定しても、その百年余の日本のことばそのもの、それは現実のことばであるが、資料の大半は音声資料にて、録音のなきかぎりあとをとどめてゐない。新聞ひとつにしても、日本国内にてはすべてを見ることができない。それらのすべての資料と、辞書に示さるる語とは如何なる関係にあるのか。

　このことが日本語の語彙を考へる上において、語彙を考へる上にて辞書を扱ふ場合においての根本のことではなからうか。すなはち一つの辞書はその辞書の製作過程におけるすべてのことばをどのやうに反映したのかのことが肝要なことであらう。そのことは現代通行の『新明解国語辞典』についてもそのままいへることである。本書中にて『新明解』への言及は屢々ある。本書とは別に『新明解』の製作過程の具体的なることについて、編集主幹たる述者は公刊乃至公表することがあってもいいのではないか。

　寸感をしるしはじめしところ、メモの何十分の一か何百分の一かにて、編集委の指定枚数である。如何ともしがたい。よって特に大目に見てくれしあと数枚にて、全く断片的に、評者にとっては重点的にしるす。

　まづ下の余説。とりあげしは二著。類義語辞典に対して〈不毛の風土に甫めて世に送られた破天荒の書〉といふに対し、日本国語大辞典に対しては〈何という語呂の悪さ〉からはじまる。そのきわまれるは「今昔物語集の場合」の最後であらう。

　右の如き引用に終始するならば、いっその事、古典大系本　という断りを除いて欲しい。筆者等の苦心を汲まぬ心無き徒輩は、大系以前の流布本を使うが可かろう。筆者等の訓みを快しとせぬならば、寧ろ全面的に　今昔　を使用せぬが可かった。

（下一三八二頁）

　これをよむと、述者の忿懣の様子がぢかに伝はってくる思ひがする。まさにその通りであるから、述者はしかしるしたのであらうが、古典大系本どころか今昔までも使用せぬが可かったとなると、忿懣の状況は察知しうるが、いささか筆のはしりすぎとも読者には映じよう。

上四七―四八頁に紹介されしデッキンズの序文はよませるものである。評者はこの中での ordinary people に共感する。これからただちに『言海』の〈普通語〉を連想するが、述者は如何に。

本論中にてよみつつ感動せしところは数々あるが、その中の一つは〈音訓を超えて〉（上二四四頁以下）であった。この〈音訓を超えて〉には国語学者としての述者と一国民であり愛国者である述者との渾然たる融合をみる思ひであった。述者の言の如く〈国語審議会の議題の方向改善として最も今日的な意義を持つ〉（上二六〇頁）ものと評者も考へる。国語審議会の構成メンバーは本書上下二冊全部はもとよりだが、特にこの〈音訓を超えて〉を熟読してもらひたい。未読の方は直ちに。

上五四八頁以下の〈言海　の功業〉、特にはじめの五四八―五四九頁にしるせしことどもは、五六四頁の〈註1　学者の研究生活を支えるもの〉とともに、窮措大をもって任じてゐる評者も全くその通りその通りとよみつつひとりで声をあげた。右註1の終り（上五六五頁）の〈独居・留守番の折は安心して昼寝も出来ない性（たち）〉は共感人口が多いのではないか。ひとり述者のみではない。五六四頁の如き生活をなす窮措大は各都道府県に何人かづつはゐると評者は考へてゐる。

落合直文の『日本大辞典　ことばの泉』にかぎらぬことではあるが、今日の学生などのあまりといふよりほとんど利用せぬ辞書につき、述者が次々としるしたることも感謝のほかない。

落合の仕込みの長さ、また緒言における〈延期の事情〉はまさに落合一己人といふより、述者の言の如く〈どこかの編集者や出版社に煎じて飲ませてやりたい言葉である〉。

今昔物語集の校注五冊に七年の歳月を要したこと、無から有を生じたことは上八七二頁にも展開される。「完成時は死のうと気違いになろうと儘よ」と思ひ、定職まで抛ったことは、あのころの述者の様子、身辺の方の話から想像はしてゐたが、このことはさきの「今昔物語集の場合」と直結する。

さきにもしるせし如く、いたるところに語釈につき述者は説く。そして〈語釈の王道は用例の蒐集から始まる。……〉（上八九九頁）のくだりもその一つである。〈王道〉の語を述者は愛用するが如くである。

しるしたきこと、話したきこと、論じたきことはまさにいくつもの山ほどあるが、既に指定紙数を超えし故、本稿としては打切らざるをえぬ。最後に苦言を一つ二つ。

述者と評者との共通の師である岡沢鉦治先生のことが何度か登場したのはうれしいことであったが、若いときの岡沢先生の名前を上六一二頁には鉦次郎ときちんとしるしながら、六一四頁にては鉦治郎と誤記（あるいは誤植か）してゐる。これについては先日述者の送ってくれた正誤表にものってゐない。人の名前、特に師の名前は正確にかいてほしい。

〈川〉と〈河〉とにつき評者は調べてはゐないが、上一五頁の〈広瀬河〉、またたとへば下九九三頁の〈黒河春村〉につき、〈廣瀬河〉は幼時より評者は〈廣瀬川〉としるしてきたが誤りだったのであらうか。

〈黒河〉につきては今まで評者のみたものは〈黒川春村〉であった。家名をついだのも〈黒川真頼〉である。ノートルダム清心女子大学附属図書館に黒川真頼・真道・真前の旧蔵本を蔵するが（黒川

本）、蔵書印ならびに普通の印はすべて〈黒川〉である。春村のみ〈黒河〉だったのであらうか。これは苦言にあらず、むしろ質問。

本書にはあちこちにローマ字だけの人物が現れる。曰く、Q・Kなど、或は某ボス、時にX大学某甲、更にT堂など。述者はよく承知してをり、故意に右の表記をとったと想像するが、読者たる評者としてはこれらの表記を歓迎しない。大学名・姓名・書店名を明記すべきである。これらのものを攻撃することが正しいと述者が考へたならば、何故にかくの如き表記をとるのか。

上下二冊をよんでゐて、述者の用語・用字にて分りにくいと思ふこと、十分に意味のくみとれぬと思ふことがいくつかあった。そのたびにまめに『新明解国語辞典』をまづ引いた。ただし評者のさがす語は同辞典にはほとんど見出せなかった。本書の用語・用字と『新明解』とが無関係だといはれればそれまでではあるが、現代日本語の資料といふ角度よりすればこの上下二冊もその資料の中に入るのである。すなはち現代日本語での一つの所産が本書である。述者と編集主幹とが同一人である辞典に、述者の用語の見出しえぬものがあるのは、表記・用語の上において、そのいづれかに欠陥はありはしないのか。見出せなかった語の一覧表を添へたい気持はあったが、遺憾ながらその紙面はここには全くない。

最後に一言。先般奈良西の京の薬師寺西塔再建の砌、棟梁の言がよかった。曰く「千年後を見てもらひたい」と。山田よ、今後とも十二分に自愛し、ひとり本邦辞書史概説にとどまらず、日本語のすべて、更に人間のことば、人類と言語とについて、千年後に見らるべき業をのこされんことを。佐藤茂は勝手に驥尾に付していくであらう。お互に長生きしよう。

（昭和五十七年七月五日稿）

――ノートルダム清心女子大学嘱託教授――